

令和七年度

門川町立小・中学校児童生徒

第四十三回読書感想文コンクール

入選作品集

門川町教育委員会
門川町立図書館



まえがき

記録的な猛暑日が続いた夏も過ぎ、ようやく過ごしやすい季節となりました。今年は、春に全国で大規模な林野火災が発生し、夏には台風や大雨による被害が全国各地で発生しました。特に、九月の台風一五号では、門川町で冠水被害が発生し、いつ、どこで災害が発生してもおかしくない状況にありました。こうした厳しい環境下にあっても、学校や家庭、地域の皆様方のご理解とご協力のおかげで、児童生徒が、のびのびと学習に取り組むことができておりますことに感謝申し上げます。

そして、今年も第四十三回「読書感想文コンクール」が実施できたことを大変嬉しく思います。

さて、本コンクールの応募数を見てみますと、六百七十点の作品が集まり、これは実に町内児童生徒の半数が応募してくれたこととなります。このことは、学校と家庭による読書活動の推進の成果であると実感しております。

本紙におきましては、応募作品の中から、審査によって入選した児童生徒の作品をご紹介します。作品を読んでみますと、作者が本に込めた想いや登場人物の心情を豊かに読み取るとともに、自分の生き方を見つめ考える素晴らしい作品が多数ありました。児童生徒がテーマにした内容を

いくつか紹介しますと、「家族愛」、「友情」、「環境問題」、「日常の幸せ」、「命の尊さ」、「平和への願い」など、まさにこれからの社会で求められる人としての生き方について考える大切なテーマを取り上げて、魅力ある作品に仕上がっていました。

これから、季節が秋から冬へと向かいます。夕暮れ時が刻々と早まるこの時期は、読書を楽しむにはとてもよい季節と言われます。本の中では世界中を自由に駆け回ったり、たくさんの人々と出会い、色々な生き方や考え方に触れたりすることができます。この時期に、家族でたくさん本の触れてみてはいかがでしょうか。

町立図書館では、本年度、借りた本を記録に残す「読書の通帳」を導入しました。これまでに多くの通帳が発行されています。児童生徒一人ひとりの成長の記録として、今後より一層の広がりが期待されています。

結びに、「読書感想文コンクール」の実施にあたり、児童生徒への指導並びに審査等に携わっていただきました各学校の先生方、そして、ご協力をいただきました保護者や関係者の皆様方に、厚くお礼を申し上げます。

令和七年十一月

門川町教育委員会 教育長 金子文雄

読書感想文発表会のうつりかわり・・・

回数	年 月 日	名 称	参加者数	対 象 者	備 考
1	59. 1.下旬	童 話 発 表 会	16	門小児童	
2	60. 1.27	童 話 発 表 会	26	門小・五十鈴小児童	
3	61. 2. 2	童 話 発 表 会	29	門小・五十鈴小・草小児童	
4	62. 1.25	童 話 発 表 会	38	町内全小学生	
5	63. 2. 7	読 書 発 表 会	37	町内全小学生	
6	元. 2.19	読 書 発 表 会	36	町内全小学生	
7	2. 2. 4	読 書 発 表 会	37	町内全小学生	
8	3. 2. 3	読 書 発 表 会	37	町内全小学生	
9	4. 2. 9	読 書 発 表 会	36	町内全小学生	
10	5. 2.14	読 書 発 表 会	34	町内全小学生	
11	6. 2.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数199 24	町内全小・中学生 入 選 者	総合評価
12	6.10.30	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数222 16	町内全小・中学生 入 選 者	総合評価
13	7.10.29	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数122 18	町内全小・中学生 入 選 者	総合評価
14	8.10.27	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数137 18	町内全小・中学生 入 選 者	作文評価
15	9.10.19	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数151 19	町内全小・中学生 入 選 者	作文評価
16	10.10.25	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数152 18	町内全小・中学生 入 選 者	作文評価
17	11.10.24	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数139 18	町内全小・中学生 入 選 者	作文評価
18	12.10.22	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数124 17	町内全小・中学生 入 選 者	作文評価
19	13.10.28	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数117 18	町内全小・中学生 入 選 者	作文評価
20	14.10.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数109 18	町内全小・中学生 入 選 者	作文評価
21	15.10.25	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数141 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
22	16.10.23	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数150 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
23	17.10.22	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数135 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
24	18.10.21	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数122 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
25	19.10.27	読書感想文コンクール 読書感想発表会	応募数119 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
26	20.10.25	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数80 9	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
27	21.11.14	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数84 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
28	22.10.16	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数78 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
29	23.10.22	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数77 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
30	24.10.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数78 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
31	25.10.19	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数65 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
32	26.10.18	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数59 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
33	27.10.17	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数54 9	町内全小・中学生 司制施行80周年記念特別賞・ 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
34	28.10.15	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数55 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
35	29.10.21	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数47 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
36	30.10.20	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数53 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
37	元.10.19	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数55 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
38	2.10.17	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数48 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
39	3.10.16	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数50 8	町内全小・中学生 最優秀・優秀賞受賞者	作文評価
40	4.10.15	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数44 4	町内全小・中学生 最優秀賞受賞者	作文評価
41	5.10.14	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数55 4	町内全小・中学生 最優秀賞受賞者	作文評価
42	6.11.17	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数45 7	町内全小・中学生 最優秀賞受賞者	作文評価
43	7.11. 8	読書感想文コンクール 読書感想発表会	代表応募数44 7	町内全小・中学生 最優秀賞受賞者	作文評価



もくじ

まえがき 1

読書感想文発表会のうつりかわり 2

小学校低学年の部

一年生最優秀賞 いたずらねこのだいへんしん 五十鈴小学校 一年 松本 悠希 6

二年生最優秀賞 きつとわかりあえる 草川小学校 二年 高橋 二愛 7

優秀賞 手で話すことば 門川小学校 二年 日高 杏美 8

優良賞 うんでくれてありがとう 五十鈴小学校 一年 大川 蒼翔 9

優良賞 つたえたい、ありがとう 五十鈴小学校 二年 松本 優奈 10

小学校中学年の部

三年生最優秀賞 どんなふうに見えるのかな 五十鈴小学校 三年 長友 鈴 12

四年生最優秀賞 八月十五日のねがい 五十鈴小学校 四年 中山 心掬咲 13

優秀賞 大切な海を守りたい！ 門川小学校 三年 道田 茉莉 15

優良賞 ぞうの死から感じたわたしの命 門川小学校 三年 田端 花 16

優良賞 平和な世界にしたい 門川小学校 四年 河野 心春 18



小学校高学年の部

五年生最優秀賞

六年生最優秀賞

優秀賞

優良賞

優良賞

おじいちゃんとの最後の旅

タンポポを咲かせたい

希望の光

元気になるための一歩

か「く」「し」「ご」「と」「

五十鈴小学校

五十鈴小学校

門川小学校

草川小学校

草川小学校

五年 松本 瑛奈

六年 松岡 明里

六年 黒木 恋華

六年 岩田 風叶

六年 牧野 日和

中学校の部

最優秀賞

優秀賞

優良賞

優良賞

まだ見ぬ自分に出会う旅

「かがみの孤城」を読んで

自由に生きる難しさと大切さ

「あの花が咲く丘で、君とまた

出会えてら。」を読んで

門川中学校

門川中学校

門川中学校

門川中学校

一年 田吹 莉央

三年 黒田 侑生奈

一年 矢野 瑠菜

三年 久保崎 莉彩

読書感想文コンクール佳作受賞者一覧

読書感想文コンクール審査委員一覧

あとがき

36

35

35

32

31

29

28

25

24

22

21

19

小学校の部
低学年
中学年
高学年



小学校一年生の部 最優秀賞

いたずらねこのだいへんしん

五十鈴小学校 一年 松元 悠希^{まつもと ひさき}

ぼくは、ひょうしに、しょうぼうしのぼうしをかぶっているねこのえがかいてあるほんをみつけました。おもしろそうだなあとおもって、このほんをえらびました。

おはなしにでてくるねこのピクルズは、ほかのねこをおいかけたり、いたずらをしてかいぬしのグッドカインドおくさんをこまらせたりしていました。ぼくは、ピクルズは、どうしてそんなことをするのかな、みんなとなかよくしたらいいのになとおもいました。

あるひ、ピクルズは、こねこを木のうえまでおいかけて、じぶんも木のうえからおりることができなくなりました。ぼくは、どうなるのかなとどきどきしながらつづきをよみました。そのとき、しょうぼうしやがきて、ピクルズをたすけてくれました。たすかってよかったとほっとしました。

それから、ピクルズは、しょうぼうしのなかまになりました。しょうぼうしのまねをして、たくさんくんれんをし、いろいろなてつだいをしました。

ぼくがいちばんこころにのこったばめんは、こねこが木からおりられなくなっているところに、ピクルズがしょうぼうしのなかまとかけつ、たかい木にのぼり、こねこをたすけたばめんです。まえは、こわくて木からおりることもできなかったのに、じぶんからこねこをたすけにいて、つれておりてくるなんて、つよいな、すごいなあとおもいました。きっと、しょうぼうしのなかまたちといっしょにはたらくうちに、みんなをたすけることやいのちのたいせつさなどにきづいたのだとおもいます。こんなやさしいきもちをもつようになったピクルズのように、ぼくも、こまっているひとをみつけたら、こねこをかけたリ、やさしくたすけてあげたいとおもいます。

(読んだ本『しょうぼうねい』)



小学校二年生の部 最優秀賞

きつとわかりあえる

草川小学校 二年 高橋^{たかはし} 二愛^{ふあ}

「こわがって知ろうとしなかったらなんにもわからないな。」

とこの本を読んで思いました。

この本は、「ライオンのくにのネズミ」という本です。ひょうしのどうぶつがかわいかったので、どんな話か知りたくなり、この本を読みました。

このお話は、ネズミの子どもがライオンの国の学校へ行くお話です。じぶんの国にかえりたいとないていたけど、リスの女の子となかよくなり、たすけてもらいながら学校に行きました。たすけてくれるともだちは、いいなと思いました。わたしにもたすけてくれるともだちがいて、学校がたのしいです。

わたしがうれしかったのは、ネズミとリスがサッカーでゴールをきめたことです。リスの国では、女の子はあまりスポーツをしないそうです。わたしは、パパとサッカーをするのでびっくりし

ました。国でちがうのは、ことばだけじゃないことを知りました。このゴールは、りすへのおかえしです。気もちはことばだけでつたわるのではないと思います。

さい後のページは一ばんわたしをびっくりさせました。なんとライオンはこわいライオンではなかったのです。いっしょにサッカーをして、なかよくおべんとうも食べて、ライオンはネズミを食べないとわかります。こわいライオンはネズミが思っていただけでした。あい手とわかりあえれば、本とうのすがたが見えてくるんだなと思いました。

わたしは夏休みにスイミングへ通いはじめました。友だちはやさしいかなあ、先生はこわくないかなあとしんぱいでした。すごくふあんでした。でも、友だちは、手や足のうごかし方を教えてくれました。先生はしっぱいしてもはげましてくれました。わたしは、じぶんから近づいて、あい手と話したり、あい手の気もちを考えたりすることは大じだなと思いました。

ライオンとネズミもきつとわかりあえる。そん

なせかいになるといいなと思います。

(読んだ本『ライオンのくにのネズミ』)



小学校低学年の部 優秀賞
手で話すことば

門川小学校 二年 ひだか 日高 あみ 杏美

わたしは『どんなかんじかな』という本を読んで、目が見えない人や耳が聞こえない人の生活をはじめてしりました。わたしのおばあちゃんとは八十さいをこえて、たまに話を聞きとりにくそうにするときがあります。わたしはおばあちゃんとおしゃべりをするのが大すきです。もっとつたわ

るように話したいなと思うことがあります。どうしたらいいかなと考えたとき、一年生で歌った手話の歌を思い出しました。

本には、目が見えない人や、耳が聞こえない人、お父さんやお母さんをじしんでなくした人が出てきます。目が見えないって、聞こえないってどんな気もちかな。大すきな人がいなくなるってどんなかんじかなと考えたら、かなしくなりました。そして、手話をもっとしらべてみようと思いました。

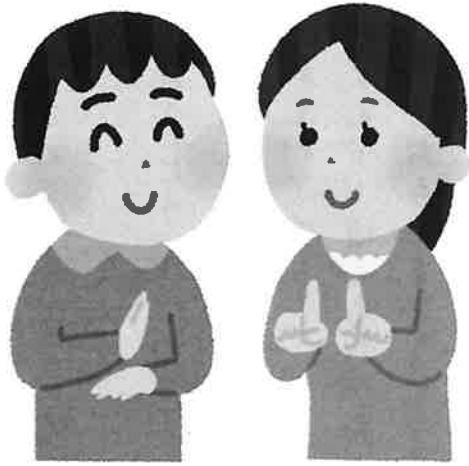
せかいには、日本語やえい語、中国語など、いろんなことばがあります。でも、そのことばが分からない人や、うまく話せない赤ちゃんやどうぶつだっています。わたしがならった「ありがとうの花」では手話をつかいます。大すきやありがとうを声に出さなくても、手のうごきでつたえられます。手話は、かん字で書くと「手で話す」とお母さんにおしえてもらいました。ことばのいみが分かれると、わたしのまわりにも手でつたえられることがあると気がつきました。

わたしの家には犬がいます。手でグーをつくる

と、おすわりをしてパーにするとまてをします。これは手話にてるな、とかんじました。手をつかうとどうぶつにも気もちがつたわるんだとわかって、うれしくなりました。

よの中には、まわりの人のたすけをひつようと
する人がたくさんいると思います。こまっっている
人に、ことばがなくても気もちをつたえられたら、
みんなえがおになります。わたしも、たくさんの方
ほうをつかって、つたえたい気もちを大切にでき
る人になりたいです。

（読んだ本・『どんなかんじかな』）



小学校低学年の部 優良賞

うんでくれてありがとう

五十鈴小学校 一年

大川 おおかわ 蒼翔 そうと

ぼくは、『うまれてきてくれてありがとう』というほんをよみました。このほんをえらんだりうは、だいめいをみておもしろそうだとおもったからです。

ぼくが、おはなしのなかですきなところは、ママをさがしていたあかちゃんが、ママをみつけたところ。すきなりゆうは、ぼくがこのあかちゃんだったら、ママにあえてすごくうれしいきもちになるとおもったからです。あかちゃんが、ママにあえたばめんをよんで、ぼくもううれしいきもちになりました。

こころにのこったところは、あかちゃんがうまれたときに、

「うまれてきてくれてありがとう。」

といってもらえたところ。あかちゃんは、このことばをいってもらいたくて、ママをさがして

いたので、そのとおりになってよかったとおもいました。また、ぼくがうまれてきたときにも、ママやかぞくみんなに

「うまれてきてくれてありがとう。」

といわれてうまれてきたのかなとおもいました。そうだったらとてもうれしいです。

ぼくは、このほんをよんで、ぼくもおかあさんにだきしめてもらいたいとおもいました。なぜかというと、おかあさんにだきしめてもらうと、あかちゃんみたいにあんしんできるとおもったからです。そして、そのときにはぼくから、

「うんでくれてありがとう。」

といいたいです。

さいきんのぼくをふりかえってみると、おにいちやんとけんかをしておかあさんをこまらせてしまうことがあります。これからは、できるだけけんかをへらして、おかあさんをこまらせないようにしたいです。そして、たくさんだきしめてもらいたいです。

（読んだ本・『うまれてきてくれてありがとう』）



小学校低学年の部 優良賞

つたえたい、ありがとう

五十鈴小学校 二年 松本 まつもと 優奈 ゆうな

わたしが生まれるずっと前の一九八五年八月十二日に、とても大きなひ行きのじこがあったそうです。たくさんの人がなくなったと聞いて、とてもかなしい気もちになりました。『パパのかきの木』という本は、そのじこでパパをなくした家ぞくのお話です。わたしはテレビでこのじこのことを知り、どんなお話なんだろうと思い、読んでみたくなりました。

わたしも、この一年でじいじとひいじいちゃんとおわかれしました。もう会えないと思うと、心がぎゅっとなみだが出ました。本の中の家ぞくも、きっとわたしと同じようにさびしくてなみだがとまらなかったと思います。

わたしが一ばん心にのこったのは、にわのかきの木のばめんです。その木はパパが生きていたときにうえたもので、じこの後も家ぞくのそばにありました。はじめてかきのみを見つけたとき、みんな

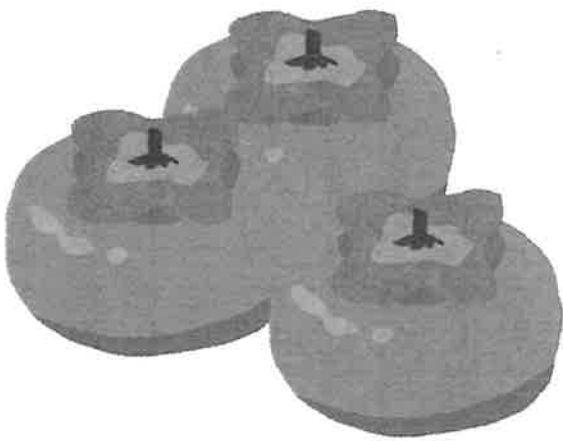
「パパからのプレゼントだね。」
と言って食べました。

「あまくておいしいのに、なみだのあじがする。」
と書かれていて、わたしはとても心にひびきました。

わたしも、ひいじいちゃんがつくっていたみかんを食べたときに同じ気もちになったからです。みかんはあまくておいしいのに、ひいじいちゃんのかおや声を思い出して、なみだが出そうになりました。食べものや木のみから大切な人を思い出す気もちが、わたしとにいてよく分かりました。

この本を読んで、家ぞくのあたたかさやいのちの大切さに気づくことができました。いなくなっ
てしまったら、ありがとうや大すきをもう言えな
くなるので、いまそばにいる人にこそ、元気なと
きに気もちをつたえたいと思います。これから、
まわりの人にありがとうをいっぱい言える人にな
りたいです。

（読んだ本・『パパの柿の木』）



小学校三年生の部 最優秀賞

どんなふうに見えるのかな

五十鈴小学校 三年 長友^{ながとも} 鈴^{すず}

この本は、主人公のトーマスという男の子が、家ぞくや親せきとごはんを食べているところからはじまります。食べながらトーマスは、みんなは、まわりがどんなふうに見えるのか考えました。わたしは、ゲームが好きなお父さんの見え方が楽しそうだなと思いました。わけは、目の前の世界が一気にゲームの中に入った気分になり、ちがう世界を感じられたからです。また、きょうりゅう好きのルーカスの見え方がわたしにもできたらいいなあと思いました。わけは、人は自分の思いこみが入った見方をしていて、自分の好きな世界を表げんしているからです。

わたしも教室でじゅぎょうをうけている時に、トーマスと同じように、友だちは、どんなふうにもものを見ているのか気になったことがあります。わたしのせきは、一番後ろで、クラス全体が

よく見えます。そのためじゅぎょう中いろいろな意見が出たとき、発表をする友だちのすがたや友だちの発表を聞くすがたが、それぞれちがうと感じることがありました。

メガネをつけている人、メガネをかけていない人についても、メガネをかけている、かけていないで、文字や物がよく見えるほかに、見え方、考え方もちがうのかなあと思いました。わたしはメガネをかけていないから、メガネをかけている人は、どんな感じでものを見ているのかが知りたいです。

自分の考えを広げてみました。まず、家ぞくの中でも、一人一人考え方がちがいます。たとえば、雨あがりにかかるとにじを見てわたしは、カラフルできれい。ずっと見ていたいなと思ったのですが、父は、きれいだな。家ぞくのみんなに見せたいな、と思うそうです。母は、雨上がりのにじを見つけたら、心がワクワクするな。兄は、にじはどのようにしてできるんだろうと考え、調べてみる。という見方、考え方をしていました。このことは、クラスの友だちの間でもちがっていると

思うし、住んでいる地いき、もっと広げると、日本のほかの遠い外国の人たちとも見方や考え方がちがうと思いました。

この本のさい後には、「人はみんな、まわりの世界を自分の『メガネ』をかけて、見ているんだ。見えているものがその人のげんじつで。それはほかの人とはちがう。人それぞれなんだな。」と書かれていました。

相手と自分の意見がちがうことはしぜんなことで。これからわたしは、意見がちがっても、相手の意見もその意見いいね。と思える広いこころをもって生活していきたいと思いました。

（読んだ本・『ねえねえ、なに見てる?』）



小学校四年生の部 最優秀賞
八月十五日のねがい

五十鈴小学校 四年 中山 なかやま 心掬 こまき

今年の夏休み、私がテレビをつけると、広島
の原爆についてのニュースが流れていた。その
ニュースを見て、なぜ戦争は起きるのだろう、だ
れが始めたのだろうと考えた。もっと戦争のこと
を知りたいと思い、図書館で本を探したところ、
『さとうきび畑の唄』という本を見つけて読むこ
とにした。

この本は、写真屋をしている明るくておもしろ
い関西人のお父さんと、やさしいお母さん、そし
て五人の子どもたちが戦争にまきこまれていく悲
しいお話だ。

結こんしたばかりの長男や、本当は生きたい、
家族にもう一度会いたいと思っていた次男は戦死
してしまう。お父さんも人を殺すことに反対して、
上官に殺されてしまう。

戦争をくわしく知らない私は、幸せな家族を引

きはなして、つみもない人の命をたくさんうばう戦争を、なぜ始めるのか、ますます分からなくなつた。

そこで、近くに住んでいる祖父母に、子どものころのことを聞いてみた。

祖父は戦争が終わった七か月後に、中国のハルビンで生まれ、日本に帰ってきた。小学生のころは麦やいも、あわご飯を食べていたそうだ。祖父の名前には兄弟の中で一人だけ「勝」という字がついていて、次は戦争に勝つという意味でつけられたと聞いた。私はまた戦争のことを考えていたのかと思う、こわくなった。

祖母は戦争が終わった三年後、日本を占領していたGHQのし設で生まれて住んでいたと聞いた。祖母の子どものころも食べ物が少なく、おやつに畑のきゅうりを食べていたそうだった。

二人の話を聞いて、戦争が終わった後でも苦しい生活が続いていたことが分かった。いまの私だったら、住む家がなくなり、食べ物が少ない生活はとてまたえられなかったと思った。

だからこそ、「さとうきび畑の唄」で心にのこっ



た場面がある。それは、学校の先生をしている長男のおくさんが、生徒の前で、

「戦争では何も解決できないと思います。」と、はっきり言った場面だ。

戦争の悪口を言っではいけない時だいに、反対の気持ちを言えるのは、とても勇気のある人だと思った。私の父は戦争は土地や水、ご飯をうばうために起こるのではないかと私に言っていたが、そのおくさんの言葉や祖父母の話からも、戦争では何も解決しないと思った。

戦争は人がたくさん死んだり、家族がバラバラになったり、悲しいことばかりだ。だから、話し合いをしっかりと、戦争が起らないようにしてほしいと思った。

世界中の戦争がなくなりますように。

(読んだ本・『さとうきび畑の唄』)

小学校中学年の部 優秀賞

大切な海を守りたい！

門川小学校 三年 道田^{みちだ} 茉莉^{まつり}

私は今年の夏楽しみにしていた事があります。それはウミガメのかんさつです。去年私のお兄ちゃんが近所のおじさんにたのまれて、毎朝五時ごろに友達とすなはまにウミガメのさんらん場所の様子をかんさつしに行っていました。今年は私もいっしょにやってみたいと思っていたからです。

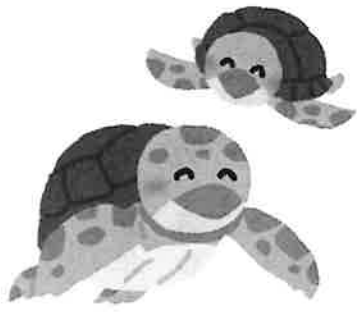
去年、ウミガメが私の家の前の向ヶはまに上がってきて、海に帰っていった足あとを見る事ができました。その足あとは海にしっかりとつながっていて、今まで見たことがないようなふしぎな足あとでした。それを見て私は本当にここにウミガメがあがってきたんだ、見てみたいと思いました。ウミガメのことをくわしく知りたいと思います。ウミガメの本をえらびました。

お母さんがメはこうらの長さ一メートル、おも

さが百キロいじょうあります。たまごをうむために一万キロはなれた日本に帰ろうとするそうです。夏の夜にりくに上がってきてすなはまにたまごを生みます。深さ五十センチのあなを後ろ足であけて一回で百くらいのだまごを生みます。その時になみだをながすこともあるけど、体のよぶんなしお水を出しているからだそうです。生み終わったらすなをかけてまた海に帰っていきます。

去年私がみたのは、たまごを生むためにお母さんがメがりくに上がってきた足あとだったので。そこは近所のおじさんややく場の人たちがたまごを守るためのさくを作って守っていました。私はなんでこんなふうに大事にまもられているのかわかっていなかったけど、この本を読むと、ウミガメのたまごはえいようがあっぺおいしいので動物が食べることがあり、生まれたばかりの子ガメもかにや鳥が食べに来てしまうことがあるからだと分かりました。

私はこの本を読んで一番心にのこったことは、海の大切さです。カメは長い旅の中で人間のすてたゴミをまちがえて食べていのちを落とすことも



あります。それはとても悲しいと思いました。一人一人がごみを海にすてないだけで、カメや魚も悲しい思いをしなくなると思います。もう一つ心にのこったのはカメの赤ちゃんをいろんな人が大切に守っているということです。お兄ちゃんのように生まれるまでを安全に見守る人や、生まれてから海に行けるように助ける人、ゴミにからまったときに助けてくれる人のようにやさしい人たちがいるということが私はうれしくなりました。

去年、はまに上がってきてくれたウミガメは、たまごを生んでいませんでした。きっと生めるようないなはまじゃなかったんだと思います。私は家の前のすなはまにゴミが落ちていたらひろってきれいにしたいです。大切な海にカメが安心してどって来てくれるように海を守るやさしい人になりたいです。

(読んだ本・『ウミガメものがたり』)

小学校中学年の部 優良賞

ぞうの死から感じたわたしの命

門川小学校 三年 田端 たばた 花 はな

『かわいそうなぞう』は、せんそう中に動物園でぞうたちをころさなくてはならなくなった、ぞうとしいく買さんのお話です。せんそう中にばくだんが落ちてきた時のことを考えて、動物園のトラやライオンなどの動物たちがころされていきました。さいごに、三頭のぞうがころされる番になりました。

三頭のぞうの名前は、ジョン、トンキー、ワンリー。しいく買さんは、ジョンにどくのいったじゃがいもを出しましたが、ジョンは長いはなでポンポンと投げ返しました。きっとジョンは、気づいていたのだと思います。そして、生きたかったのだと思います。それでもジョンは、えさや水をもらえなくなつて死んでしまいました。かわいそうでしたまらなくて、とても悲しい気持ちになりました。

ワンリー、トンキーもえさや水をもらえなくなり、さいごの力をふりしぼって芸をしました。今まで芸をしたらえさや水をもらえていたからです。二頭は、芸をしながら死んでいきました。しいく買さんは、きつととても悲しかったと思います。言葉は通じなくても心は通じていて、おたがい思い合っていたのに、辛い思いをしてしまうしいく買さんの気持ちを考えると、むねが苦しくなりました。

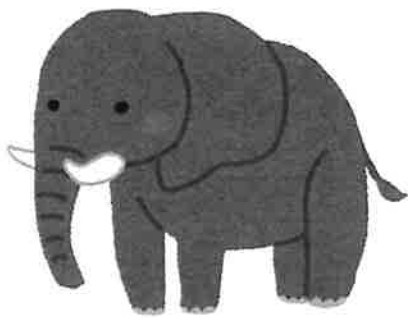
ワンリーとトンキーは、いぶくろの中に一しずくの水さえも入っていませんでした。しいく買さんもつらい思いはさせたくなかったはずです。せんそうがなければ、ジョン、トンキー、ワンリーも死なずにすんだはずです。もし、わたしが大切にしていたハムスターや自分の家族、友だちを死なせなければならぬと思うと、とてもこわくて悲しい気持ちになりました。そして、それと同時に今、自分が家族や友だちとすごせるのは、当たり前ではなくて幸せなことなんだと気づきました。

今、世界中でせんそうが起きている中、このぞ

うたちやしいく買さんと同じような思いをしている人たちがいるかもしれません。つみのない人たちや動物たちがまきこまれていくのは、とても悲しいです。そして、日本で起こったらと考えるととてもこわくてたまりません。だれかがこんな思いをするせんそうは、もうあってほしくありません。むずかしいことかもしれないけれど、こんなにこわいせんそうは、わたしと同じようにみんなはんたいするはずですよ。

わたしは、今幸せに生きられていることに「ありがとう」の気持ちをもちたいです。そして、つみのない人や動物たちに悲しい思いをさせるせんそうのこわさ、この二つのことをわすれないようにしたいです。

(読んだ本・『かわいそうなぞう』)



小学校中学年の部 優良賞
平和な世界にしたい

門川小学校 四年 河野^{かわの} 心春^{こはる}

『私はどこで生きていけばいいの?。』

という本の題名の意味がよく分からなくて、私は、この本を読んでみたくなりました。

この本を読んで、今でもこのようなことが世界で起きているとは、信じられませんでした。

戦争が起きて、家族みんなで荷物をまとめ、ひたすら歩いて、丘をこえて、海をこえて、安全な場所をもとめて旅をしなければならない人たちがいます。逃げた場所では、階段のうらがわや、テントがたくさんなんだ村で生活しなければいけません。暑かったり寒かったりしても、がまんするしかありません。どれだけ悲しくて、こわくて、大変でしょうか。自分のことだったら、とそうぞうすると、たえられないかもしれません。

私には、安全にくらせる家があり、ごはんを食べられて、学校に行けて、友だちと楽しく遊べま

す。私にとっては、これがふつうです。しかし、世界では、ちがいます。

本の初めに出てくる、ノーベル平和賞受賞者マララ・ユスフザイさんについて、少し調べました。マララさんはパキスタンという国の北部に住んでいました。その地いきをし配していたタリバンというぶそう集だんのリーダーたちは、女の子が学校に通うことがよくないと考えていたのです。そのため、女子高を閉ざしたり、学校をばくはつさせたりしました。マララさんは、女の子にも教育を受けるけん利があると命がけでうったえたのです。なぜ、マララさんの国では女の子が学校に行ってはいけないのかふしぎです。私は、女の子です。が学校へ行くことができます。学校では、男女でかんけいなく勉強することができます。でもマララさんの国では、女の子が勉強ができなかったり、しょう来の夢がかなわなかったりする子どもたちがいます。

この本は、戦争で国をうしなってしまった人々の悲しさや苦しみがよくわかる本です。

この本が、ずっと未来までのこっていてほしい

と思います。そして、未来の子どもたちに、戦争は起こしてはいけないことを教えてあげたいです。全世界の人たちが幸せで勉強もできる平和な地球になってほしいです。

今でも戦争が起きている国があります。早く戦争が終わってほしいです。そのために、戦争している国の大人が平和な国になるように話し合いをしてほしいです。安全で、ごはんも食べられて、そして勉強もできる国に少しずつなっていったほうがいいです。

そうしたら子どもたちは、「私はどこで生きていけばいいの?」という気持ちがなくなると思います。

地球上から戦争がなくなったら、人々は、物も心も豊かになり幸せになっていくと思います。

(読んだ本・『私はどこで生きていけばいいの?』)



小学校五年生の部 最優秀賞
おじいちゃんとの最後の旅

五十鈴小学校 五年 松本 瑛奈
まつもと えな

「最後におばあちゃんとの思い出の家にもどりたい。」

おじいちゃんのこの言葉をきっかけに、主人公のアレフはおじいちゃんの故郷と一緒に旅することを計画します。おじいちゃんとの思い出を振り返りながら、二人の絆が深まっていく様子が描かれています。

私も主人公のアレフと同じで、今年ひいおじいちゃんとお別れをしました。ひいおじいちゃんもしばらく入院していましたが、

「最後に家に帰りたい。」

と言って、家に帰ってきました。家でみんなと過ごせたのはたった一週間でしたが、しわしわだけど大きな手でたくさん握手をしたり、私たち一人ひとりの名前を呼んでほえんだりしてくれました。もう声は出なかったけど、ちゃんと分かって

くれていてうれしかったです。

アレフのおじいちゃんがだんだん弱っていく場面では、一生懸命に生きようとするひいじいちゃんの姿を思い出して涙があふれました。

ひいじいちゃんとの最後の一週間の中で、幼稚園の運動会に毎年来てくれたこと、遠見山で花見をしたこと、遊びに行くといつも育てた果物を食べさせてくれたことなど、ひいじいちゃんのおかげがえのない思い出を振り返りながら、心の中で最後の旅をしたような気持ちになりました。アレフもきっとわたしと同じように、悲しいけれどもたたかい気持ちでしたんだろうと思います。

アレフとおじいちゃんの最後の旅の一番の目的は、おばあちゃんがまだ生きていた頃におじいちゃんのために作ったコケモモのジャムを病院に持ってくることでした。口が悪くて不器用で頑固なおじいちゃんですが、おばあちゃんのことを深く愛していました。天国でまたおばあちゃんと会えるように、きれいな言葉を練習する場面が一番心に残っています。

わたしのひいじいちゃんも、ひいばあちゃんの

ことが大好きでした。アレフのおじいちゃんみたいに頑固で不器用だったけど、いつもひいばあちゃんのことを気にかけて心配していたひいじいちゃん。ひいばあちゃんと手をつないだまま天国へ旅立ったあの瞬間はとても幸せだったと思います。ひいじいちゃんがずっと守ってきたさっちゃんのことをみんなで守っていくねと約束しました。

この本を読んで、家族みんなでいられる時間をもっと大事にしていきたいなど改めて思いました。いるのが当たり前で、なかなか素直になれない時もあるけれど、これからたくさん「ありがとう」を伝えていきたいです。

（読んだ本・『おじいちゃんとの最後の旅』）



小学校六年生の部 最優秀賞

タンポポを咲かせたい

五十鈴小学校 六年 松岡 まつおか 明里 あかり

夏休みが始まり一週間が過ぎた頃、私は一冊の本が目に残った。その本は、『ぼくとチェルノブイリのこどもたちの五年間』という題名で、表紙には青空の下でたくさんタンポポが咲いている写真がのっていた。また、題名の「チェルノブイリの」という部分が赤い文字で書かれていて、なぜだろうと不思議に思い、手に取った。

一九八六年四月二十六日、旧ソ連のウクライナ共和国にあるチェルノブイリ原子力発電所で史上最悪と呼ばれる爆発事故が起きていた。放射能を浴びた子どもたちは、小児甲状腺ガン患者として増え続けている。現地の悲しい状況を知った筆者菅谷昭医師は、ベラルーシで治療を行うために暮らし始める。そこで出会った、病と悲しみを乗り越え、明日への希望を胸に精一杯生きている子どもたちの様子が、この本には書かれていた。

私は、手術直前に初めて人前で涙を流し、声を殺して美しい笑顔を見せたアリョーナの姿に心をひかれた。悲しみをこらえきれなくなるほどずっとがまんしていたことを痛感したからだ。

また、菅谷医師の行動力にもおどろかされた。菅谷医師は勤めていた大学の退職金を使い、被害にあったチェルノブイリの子どもたちを救うために自らの足で放射能汚染地域へ行ったからだ。私だったら、平和な国を離れ、外国で暮らすこと自体、不安でできないと思った。

この本にでてきた子どもたちは、手術後、元気で明るく、笑顔で過ごしていた。しかし、自分が背負っている病気について知り、泣いた子どもも少なくないはずだ。日本のように十分整った医療環境ではないところで手術し、後遺症が残ってしまった子どもたちもいるだろう。

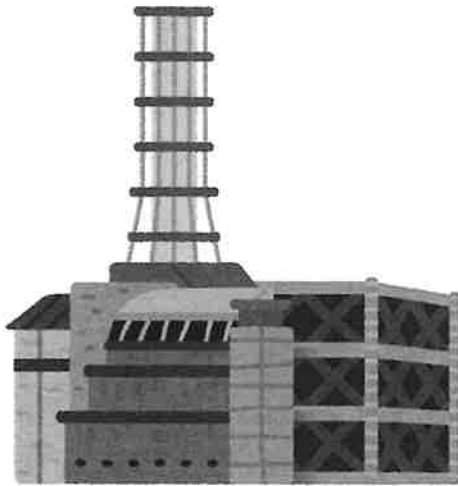
そんな子どもたちの存在を知り、はげましの言葉をかけることが私たちの使命ではないかと考えた。

この本の表紙にのっているタンポポの咲く地域は、人が住めなくなるほどの放射能で汚染された

地域だそうだ。そんな地域でも美しく咲くタンポポのように、周囲の人に希望を与えられる人になりたいと思った。私は、自然災害がもたらした被災地や被災した人たちをテレビで見た時、「かわいそう」という思いが真っ先に思い浮かぶ。しかし、被災した地域に住む方々はそんなことはとっくに乗り越え、頑張って強く生きている。

私は、「かわいそう」ではなく、「頑張れ」「頑張ろう」と言える人になりたい。

(読んだ本・『ぼくとチェルノブイリのこともたちの五年間』)



小学校高学年の部 優秀賞
希望の光

門川小学校 六年 黒木 恋華くろき れんげ

私が住んでいる門川町も海の町だ。南海トラフ巨大地震が起きれば津波の心配もちろんある地域である。この本を読みながら、海のそばで生きる私たちも同じ状況になる日が、そう遠くなく来るかもしれないと思うと、災害への備えについて深く考えさせられた。

奈緒さんが書いた『大津波』では、三月十一日当日の様子が目に浮んでくるほど鮮明な内容で、まるで本物のサイレンや叫び声が聞こえているような気分になり読みながら涙が止まらなくなってしまった。もし私がそれを体験していたなら、奈緒さんのように、まず家族が無事なのかと考えると思う。地域の人々の協力や、大人が子供たちに優先して食料を渡す場面では、ああ、私たち子供はいつもだれかに守られているのだと理解することができる。避難所での生活は、それまでの生

活とはまったく違い、大人ですらものすごいストレスだっただろう。私には想像もできないくらいだったのではないかと思う。そんな中で全国から被災した大沢小学校の児童を心配するたくさんの手紙のあたたかい言葉を読んだ子供たちは、新聞を作ることとそれを多くの人に伝えようとする。自分たちも被災しているのになんて前向きで正しい行動力なのだろうと思った。

そしてこの本は言葉や文字の力は大きいということも教えてくれた。子供たちが作った新聞が、被災者の心をはげまし、生きる希望の光になったのだと思う。新聞を通して、だれかがだれかのために頑張っていること、それに気づいている人がいるということ、それを伝えたいという気持ちから出来ていることが伝わってくる。

大沢小学校では子供たちが作る新聞の『海よ光れ』と、もう一つの『海よ光れ』がある。表現劇の『海よ光れ』だ。明治にも津波の被害にあっているため、津波は必ずまた来るという教えを劇で語り継がれているのだ。明治、昭和、平成と、津波の被害にあっても協力して乗り越え支えあって

生きてきた地域であることが、新聞の『海よ光れ』を読むとよく分かる。悲しみや苦しみという言葉も多かったけれど、それ以上に感謝の言葉が多かったように感じる。

今年は全国ニュースで取り上げられるほど、七月に日本で大災害が起きるという予言の話が広まっていた。夏休みに入る前には学校でも同級生や先生もその話をしていくくらいだ。結局この七月、大震災といわれるほどの地震や津波は起きていない。しかし、世界で発生するマグニチュード六以上の地震の内、二十パーセント以上が日本で起きているそう。災害大国と呼ばれる日本では多くの自然災害のリスクがありいつどこにいても、災害にあうか分からないと思う。だれにも予言することはできない。一日一日を大事に生きて、感謝の心を大切にしていきたいと思う。

(読んだ本・『海よ光れ!』)



小学校高学年の部 優良賞

元気になるための一歩

草川小学校 六年 岩田^{いわた} 風叶^{なぎと}

みなさんは「ずるやすみ」という言葉を聞いて、どんなイメージをもちますか。ぼくはこの本を読むまで、ずる休みは悪いことだと思っていました。この本は、主人公の雄介が友達からいじめられ、回復するためにずる休みをして元気にもどる「いずるやすみ」をするお話です。

雄介がずる休みをすることになったのは、前にならえのやり方をまちがえ、となりのクラスの友達にバカにされたからです。毎日真似をされ笑われていると、だんだん学校に行きたくなくなってきました。ぼくは、この時の雄介の気持ちがよくわかりました。だれでもまちがえたり失敗したりすることがあるのにしつこく言われると、ぼくも心がしずんでいきます。こうやっていじめが始まっていくんだなあと思いました。

雄介は、お父さんに相談しました。お父さんか

ら、

「明日はずる休みをするといい。早いうちに力をもらいに行こう。」

と言われました。ぼくは、

「えーっ。」

と思いました。お父さんはどうして言うのだろうと疑問に思いました。ずる休みをしてもいいのだろうか、どんな力をもらうのだろうかと思いました。お父さんの言うずる休みは元気になるためのずる休みで雄介のことを思いやる気持ちが伝わってきました。そして、自然や周りの人達からの言葉が力になったのです。ぼくは、相談するという行動がすごいと思いました。だれかに相談すると、いじめがもっとひどくなると考えたからです。でもひとりでがまんするのではなく、自分自身も行動することが大切だと思いました。

一番心に残った場面は、最後の場面で、夜ご飯の時にみんなで、

「いずる休みにかんぱい。」

という所です。雄介が元気を取りもどし笑顔でかんぱいするすがたがうかんできました。ぼくも読



んでいて心が温くなりました。いじめられたことがあるのは雄介だけでなく知り合いの正弘もだし、ずる休みは先生おばちゃんもしたことがあるのだと分かり、自分一人だけではないと気づき心や体に力が入っていく雄介の様子がわかりました。明日の朝、雄介は、むねをはって学校へ行くと思います。そして、前へならえと、前回のまちがいや笑話に変わって言えると思います。周りの友達も笑いとばしてくれると信じたいです。

ぼくは、いじめをされたこともしたこともないと思っていました。しかし、よく考えるといじめになったかもしれないと思うことがあります。ちよつとしたからかいがいじめにつながることがわかったからです。これから、自分の言葉や行動に気をつけ、クラスの中に雄介みたいな人をつくらないようにしていきたいと思います。

(読んだ本・『ずるやすみにかんぱい』)

小学校高学年の部

か「く」「し」「ご」「と」

草川小学校 六年 牧野^{まきの} 日和^{ひより}

この本のタイトルを見たとき、かっこがいっぱいついていてるけどどういう意味なんだろうと、とても気になりました。秘密の話なのかなと思いました。

この本には、いろいろな「かくしごと」が出てきます。友達や家族に言えないこと、自分でも本当の気持ちに気付いていないこと、やさしさからうまれるうそ。読みながら、私にもこういうこと、あるなと何度も思いました。

心に残ったのは、「本当のことを言えない気持ち」についての場面です。登場人物の中には、大切な人をもってわざと気持ちをかくしたり、うそをついたりしているとところを読んで、うそって全部悪いことじゃないんだと気づかされました。うそにも、人を思いやる気持ちがかくれていることがあるんだなと思いました。

わたしも前に、友達に心配をかけたくなくて、本当は落ちこんでいたのに、ぜんぜん平気などと言ってしまったことがあります。でも、あとから話してもよかったかも、話せばよかったなと思いました。思いやりからうまれた「かくしごと」もあるけど、本当の気持ちを伝えることで、もっと相手とつながれることもあるんだと、その時感じました。

この本の中で、だれかの気持ちを考えられることのむずかしさと「やさしさ」について、あらためて考えさせられました。人に何かを言うとき、その言葉がどう伝わるか、どう感じられるかを考えることはとても大事だと思います。でも、言わなかったことで、かえってすれちがってしまうこともある。だからこそ、どうして言えなかったのか、どうしてかくしてしまったのかという気持ちまで考えることが大切なのだと思います。

この本を読んで、わたしは本音とかくしごとのあいだにある気持ちを、もっと大切にしたいなと思いました。そして、自分のことも相手のことも、ちゃんと考えられるようになりたいです。ただ、

正直なだけじゃなくて、やさしさのある言葉を使える人になれたらいいな、と思います。友達や家族との中で、うまく気持ちを伝えられないときがあるかもしれません。でもそんなとき、この本のことを思い出して、相手の立場になり、相手の気持ちを考えたり、やさしい気持ちで話せるようにしたいと思いました。

『か』『く』『し』『ご』と『』は、読み終わったあともずっと心に残る、大切な一冊になりました。これから、たくさん本を読み、自分の心を育てていきたいです。

(読んだ本・『か』『く』『し』『ご』と『』)



中学校の部



中学校の部 最優秀賞

まだ見ぬ自分に出会う旅

門川中学校 一年 田吹^{たぶき} 莉央^{りお}

私は今、十三歳だ。将来、何になりたいかどんな進路を歩むのかについて考える機会が比較的多い方だと思う。小学校では、毎年、キャリアパスポートを書き、その当時どんな夢や目標をもっていたかをつづってきた。去年の夏は、私立受験や進路について家族で話し合う時間が多かった。

私には行きたい高校がある。受験をするために公立の門川中学校に進学することに決めた。正直、思っていた以上に迷いが出ていて、これまでにない感情や焦りがあった。真剣に考えないといけない時期に来たのかなと感じ始めていたときに図書館で『十四歳の仕事道』に出会った。私はあと五年もすれば、成人をむかえる。きっとこの五年の中で、なりたいたいのものが明確になり、したいことがはっきりと見えてくるに違いない。今のうちにできることは何だろうと思ひ、本を手にとって読んでみた。

筆者の玄田さんは、「仕事道とは、知らないだけれかとの出会いやつながりを通して今まで知らなかった自分を発見する道」だと言っている。

この言葉を読んだ時、「ああ、これが自分に足りてなかった考え方なのかもしれない」と思った。私はこれまで、「自分に合う進路は何か」「将来どんな仕事に向いているのか」と一つの答えを見つけてようとしていたし、それを期待をされているように感じていた。玄田さんの「人との出会いや経験の中で、自分でも知らなかった新しい自分に出会える」という考えに触れたとき、少し視野が広がったような気がした。

実際、これまでの学校生活の中でも、友達や先生、部活動の先輩との関わりの中で、「こんな一面が自分にもあるんだ」と気付いたことはあった。でも、それを進路や将来にどうつなげていくかは分からなかった。玄田さんの言葉に触れ、人とのつながりや経験こそが、「自分探しの旅」なのだと思うようになった。

進路について考えると、不安や迷いが消えない。希望をもって決めた進路だが、本当によかったのだろうか。と、ちようちよしてしまう。でも、こ



(読んだ本・『十四歳からの仕事道』)

の本を読んで、全てを今すぐ決める必要はないのだと感じた。まずは、人との出会いを大切にし、つながっていくことが今の私にできることなのかもしれない。その中で自然と、今まで知らなかった「自分」が見えてくるにちがいない。

この感想文を書きながら、自分の中で少しずつ変わってきた気持ちを感じている。これまででは、「進路Ⅱ正しい選択」「失敗しない道を選ばなくては」という気持ちが強かった。でも今は、「自分もまだ知らない本当の自分の個性や専門性をいつか身につけるために行動していくことが大切なのだ」と考えるようになった。

「十四歳からの仕事道」は、進路や将来に悩む私に「答え」ではなく、「考える力」をくれた一冊だった。玄田さんの言葉を胸に、私はこれからの進路も人生も「まだ見ぬ自分」に出会う旅として受け入れていきたい。いつか、「この道を選んでよかった」と思える日がくるように、目の前の一步を大切に歩いていきたいと思う。

中学校の部 優秀賞
安心できる居場所の大切さ

門川中学校 三年 黒田 侑生奈 くろだ ゆきな

私が選んだ本は『かがみの孤城』という本です。なぜこの本を選んだのかというと、母にすすめられ長いし、分厚い本だとも思いつつ、読んでみると登場人物の一人一人の物語に興味を持ち、読みすすめていくにつれてだんだんと面白くなってきましたからです。

この本は不登校になった主人公の中学一年生のころが、ある日、部屋の鏡から不思議なお城へと迷い込みます。そこには、彼女と同じように学校に行けない中学生が六人いました。彼らの前に現れた「オオカミさま」は、城に隠された「願いの鍵」を見つければ、どんな願いも叶えてくれると告げます。しかし、もしルールを破れば、オオカミさまに食べられてしまうという厳しいものでした。最初は互いに心を閉ざしていた七人ですが、少しずつ友情を育んでいきます。そして、城に隠された謎を解き明かすうちにこの城が過去のいじ

めを経験した一人の少女が、未来の自分たちを救うために作った「時間と空間を超えたシェルター」であることがわかります。最後に、彼らはそれぞれの現実へと戻っていきます。城での記憶は失われてしましますが、そこで得た絆と勇気を胸に、ここからは現実世界で仲間たちと再会を果たし、再び前へと進んでいくという物語です。

この本を読んで私は「居場所」は物理的な場所だけを指すのではないのだと思いました。それは、心を許せる誰かがいる場所であり、自分のことを理解してくれる人がいる場所なのです。たとえ今、辛い思いをしている人がいても、いつかはこころたちがそうあったように、自分を理解してくれる仲間と出会うことができる。そう信じることでできました。私の居場所はこころたちとは真逆でとても楽しくて充実しています。辛い時や苦しい時もあるけれど満足しています。

この物語は城に隠された鍵を探すというミステリー的な要素もあり、読み進める手が止まりませんでした。狼のお面をつけた少女「オオカミさま」の存在、そしてそれぞれの登場人物が抱える秘密。すべての謎が明かされたとき、私は大きな衝撃と

感動を覚えました。

一番印象的だったのは、彼らがそれぞれ異なる中学校に通っていたにもかかわらず、深い部分でつながっていたという事実です。ある人物の勇氣ある行動が、別の誰かの心を救い、それがまた別の誰かの人生を変えていく。人と人とのつながりがまるで奇跡のように彼らを結びつけていたのです。

物語の終わりに、それぞれが現実世界に戻り、少しずつ前向きに歩み始める姿は、読んでいる私の心にも希望の光を灯してくれました。私もこれから沢山の人たちと出会い、沢山の関係を持つようになります。なので誰かの痛みに寄り添い、誰かにとっての「安心できる居場所」になれるような人間になりたいと強く思いました。この本は私にとって、そんな勇氣と優しさをくれた忘れられない一冊になりました。



（読んだ本『かがみの孤城』）

中学校の部 優良賞

自由に生きる難しさと大切さ

門川中学校 一年 矢野^{やの} 瑠菜^{るな}

この本を手にとったきっかけは、読書感想文でおすすめの本を調べていて、『車輪の下』という言葉にどんな意味があるのか考えたからだ。『車輪の下』の本の特徴や簡単なあらすじを見て、主人公ハンスと自分の姿が重なるような気がした。

物語の主人公ハンスは、小さな町で「優秀な子」に育てられていた。まわりの大人たちからは強く期待されていて、神学校に入るために毎日必死で勉強し、見事合格する。だがその代わりに、本当の自分を見失ってしまう。合格したあとも、心が晴れることはなく逆にどんどん苦しくなっていた。

私自身、小学校のころ「頭がいいね」「成績いいね」と言われることが多かった。けれどもそれが誇りというより、「勉強しなければ他人事ではいられない」という気持ちで、心のどこかで苦しくなっていた。私はこの本を読みながら、心が晴れるということとは、逆に心の中で、何かを抱えていくこ

となのだと感じた。

中学生になり、テストでいい点をとることが最初はうれしかった。しかしだんだんと、「優秀であること」「期待に応えること」が怖くなっていた。

特に印象に残ったのは、ハンスが神学校で唯一心開けた友人ヘルマンと出会う場面だった。ヘルマンは、自由で自分の意見をはっきり言う少年だった。そんなヘルマンの存在がハンスにとっては救いだったのだと思う。私も、もし学校で何でも話せる友達がいなかったら、心が苦しくなり、ハンスのように退学してしまっていたかもしれないと思った。ハンスがまた一人ぼっちになってしまったとき、私も胸が痛くなった。

この物語を読んで、「誰かに認められたい」「ほめられたい」という気持ちは誰にでもあるが、それが大きくなりすぎると、自分自身を見失ってしまうということがわかった。私はこれまで、友達の前で失敗するのが怖くて、本当はしたいことも我慢してしまいうことが多かった。でも、この本を読み終えたとき、私はふと思った。もし、私のまわりにハンスのように苦しんでいる子がいたら、自分は気づいてあげられるだろうか。そして、そっ

と声をかけることができるだろうか。今までは、「努力すればうまくいく」「頑張れば報われる」と教えられた気がしていたが、この本を読んで、自分の気持ちに耳を傾けることこそが大切なのだと、はじめて本当の意味でわかった。「大丈夫？」と声をかける勇気を持てたら、きっと違った未来があると思う。だから、私はそういう人になりたい。

「車輪の下」は百年以上前に書かれた物語だけれど、今の私たちの生活にも強くつながっていると思う。プレッシャーや孤独、理想の自分と現実の自分とのギャップ。どれも私たちが直面していることをこの本は教えてくれた。

これから私は、ただ勉強をがんばるのではなく、「どう生きたいのか」という気持ちを大切にしていきたい。そして、自分の気持ちをごまかさず、まわりの人の心にも気づき、自分の足で歩いていけるような強さと優しさを持った人になりたい。「車輪の下」が教えてくれたこの気づきを、これから自分の生き方に、しっかりとつなげていきたい。

(読んだ本・『車輪の下』)

中学校の部 優良賞

主人公の思いと行動を通して

門川中学校 三年 久保崎 莉彩

私がこの本を読もうと思った理由は、前にこの本が原作の映画を見て、心に残る場面がたくさんあり、もっと物語を深く知りたいと思ったからです。映画では描かれていなかったシーンや登場人物の気持ちたちが丁寧に書かれていて、原作だからこそ感じられる思いがありました。

この本は、現代に生きる中学生の百合が、ある日突然、戦争中の日本にタイムスリップしてしま



うところから始まります。そこで出合った彰という青年を中心に、生きることや命の大切さに触れていく物語です。主人公の百合さんは自分と同じくらいの年齢なので、「もし私が同じ状況だったら」と、自分と照らし合わせながら読むことができました。

この本の中で特に心に残ったのは、百合さんが彰さんに

「戦争に行かないで、一緒に逃げよう」

と伝えた場面です。当時の人たちにとっては戦争に行くことが当たり前のように思われていた中で、命を大切にしてほしいという百合さんの気持ちがとても強く伝わってきて、胸がいっぱいになりました。初めの頃は自分のことではいっぴいだっただけで、百合さんが、大切な人の命の重さを初めてはつきりと実感した場面だと思います。これまで百合さんは、戦争や人の死をどこか他人事のようにしか感じられていなかったのかもしれませんが、しかし、初めて大切な人を失うかもしれないという現実に直面して、改めて命の重さに触れたのではないのでしょうか。百合さんは、自分でも何が正しいのか分からないまま、それでも「生きてほしい」とい

う思いだけを信じて、必死に言葉をしぼりだしていた場面に、読んでいた私まで心にくるものがありました。百合さんは決して立派な言葉を使ったわけではないけど、伝えようとした思いはとても純粋で真っすぐで、だからこそ彰さんにもよく伝わったのだと思います。私は、そんないつでもどこでも自分の気持ちに正直で、真っすぐに行動できる百合さんの姿がとてもかっこよくて、私もそんなふうになれたらいいなと思いました。

物語の最後、百合さんが現代に戻り、七十年越しに彰さんからの手紙を読むシーンがあり、その場面もとても印象に残っているのを覚えています。時を超えて届いた言葉のひとつひとつが真っ直ぐ心に響いてきて、戦争の時代を生きた人だからこそ、自分が今当たり前に過ごしているこの時間は、とても貴重で恵まれているものなんだと気づくことができました。

また、戦争という大きな時代の流れの中でも、百合さんの周りの人たちが見せてくれた優しさにとっても心が温まりました。苦しいことやつらいことがたくさんある中で、誰かを思って行動する人

たちの姿がとても印象に残っていて、戦争の時代だからこそ、優しさはより大きな意味をもっていたんだと気づかされました。

この本を読んで、私はこれから、今の生活や身のまわりの人たちをもっと大切にしていきたいと思いました。いつもそばにあるからといって当たり前だと思わず、ひとつひとつの出来事や出会いに感謝しながら毎日を過ごしていきたいです。戦争の時代を生きた人たちの思いを忘れずに、私も自分にできることを少しずつ考えていけたらいいなと思います。

(読んだ本・『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』)



読書感想文コンクール 佳作受賞者

小学校低学年の部

草川小学校	一年	岩田 零奈
草川小学校	一年	請関 寛大

小学校中学年の部

草川小学校	三年	請関 明莉
草川小学校	四年	岩田 奈夕

小学校高学年の部

草川小学校	五年	請関 瑚夏
五十鈴小学校	五年	横山 太陽

中学校の部

門川中学校	一年	時任 鈴花
門川中学校	二年	横山 こころ

読書感想文コンクール 審査委員

審査委員長

草川小学校

校長 鈴木 重徳 先生

審査委員

門川小学校 宮園 美紀 先生

草川小学校 古閑 絵里香 先生

五十鈴小学校 中谷 佳代 先生

門川中学校 後藤 真理子 先生

門川中学校 田口 敬汰 先生

社会教育指導員 黒木 貞子 先生

あ と が き

第四十三回「門川町読書感想文コンクール」に、今年も多くの児童生徒が応募してくれました。

本年度の作品応募総数は、六七〇点（小学校五三一点、中学校一三九点）でした。この数は、夏休みには、他の作品募集もたくさんある中、とても多い数だと思います。このことから、先生方がこのコンクールを大事に思っていること、児童生徒及び保護者のみなさんの読書活動への関心の高さが窺え、大変うれしく思います。

各学校での一次審査を経て、町の審査会に出品された作品は四点（小学校三二点、中学校一二点）で、いずれも甲乙付けがたい力作ぞろいでした。そのため、審査員は、審査会前に、学校や自宅で、全作品を読み深め、審査員としての考えをもって審査会に臨みました。また、審査会では、作品一つ一つについて意見を出し合い、公平に点数をつけて審査を行いました。私は審査員長として、審査員の先生方の教育のプロとしての目の付け所や児童生徒の思いを全力で受け止めようとする姿に感激したところです。

その結果、小学校は、低・中・高学年部より、それぞれ最優秀賞二点（各学年一点）、優秀賞一点、優良賞二点、佳作二点、中学校は、最優秀賞一点、優秀賞一点、優良賞二点、佳作二点の計二十七点の

作品を選考させていただきました。

さて、ここで作品の内容に少し触れてみますと、ややもすると作品のあらすじ紹介になりがちな読書感想文ですが、本から広がる世界に感動したり、共感したり、自分を同化させたりして、子どもたちの感性が豊かに表現されていました。低学年や中学年の作品は、家族愛をテーマにした作品が多かったように思います。また、高学年や中学生になると、社会に対する意見、自分の生き方を見つめる内容が書かれており、大変素晴らしいです。

さらに、選書について触れてみますと、今年は戦後八十年に当たる年ということもあり、戦争に関する本を選んだ児童生徒が多く、このことは今回のコンクールの特徴と言えるものではないかと思っています。このことから、児童生徒が世の中の動きにも関心をもって選書を行っていることにも関心したところです。

門川町では、読書活動の推進を重点の施策として、「門川町子どもたちに読ませたい図書百冊」の選定など様々な取組を行っています。本町の児童・生徒には、今後も様々な本との出会いを通して、心豊かに成長してくれることを心から願っております。

令和七年十一月

審査委員長 門川町草川小学校 校長 鈴木 重徳